

# バルトの楽園

2006(平成18)年5月9日鑑賞(東映試写室)



監督=出目昌伸/脚本=古田求/出演=松平健/國村隼/阿部寛/板東英二/ブルーノ・ガンツ/オリバー・ブーツ/コスティア・ウルマン/高島礼子/平田満/市原悦子/大後寿々花/中山忍 (東映配給/2006年日本映画/134分)

……徳島県鳴門市の板東俘虜収容所を舞台に、会津流武士道とハーグ条約に則り、青島攻防戦におけるドイツ人捕虜と村民との融和を目指すのは、松平健扮する松江所長。いかなる時代であっても、真の武士同士の心は通じ合うもの。そして、音楽が与える感動は万国共通のもの。そんな当たり前のことを率直に教えてくれるのがこの映画。大晦日にベートーベンの『第九』を聴く日本人のルーツがここに……。

## 徳島 VS 松山

この映画の舞台である板東は徳島県鳴門市にある。板東俘虜収容所は第1次世界大戦における青島のドイツ兵捕虜を収容し、この映画が描くような日本の武士道とハーグ条約に則った捕虜への待遇を行ったことで有名。『バルトの楽園』は、この板東俘虜収容所における日本人とドイツ人捕虜との信頼と絆を描いた物語。

しかし10年前に既にその見本が、私の故郷である同じ四国の松山にあった。松山俘虜(=捕虜)収容所は、日露戦争の捕虜6000名を収容するため全国ではじめてつくられたものだが、県による「捕虜は罪人ではない。祖国のために奮闘して敗れた心情を汲み取って侮辱を与えるような行為は厳に慎め」との訓示を受けて、松山市民はロシア人捕虜と市民同然に接したため、松山の「大街道」という商店街は捕虜で賑わっていたと言われている。また、私が小学生時代に訪れたことのあるロシア人墓地には、旅順艦隊の船長ボイスマン大佐ら98柱の墓があり、今でもその墓地は大事に保存され、供え物や花の絶えることがない状況となっている。

捕虜に対する模範的対応という意味では、松山の方が徳島より先輩であることはまちがいない。

もっとも、ロシアにはロシア民謡があり、チャイコフスキーら有名な音楽家が存在していたにもかかわらず、板東におけるドイツ人捕虜によるベートーベンの『第九』ほど音楽の影響を受けなかったことは少し残念……？

### 奥羽越列藩同盟 VS 薩長連合の今は……？

日露戦争100周年が今年の2005年だから、明治政府の成立からは既に100年以上を経たことになる。しかし、私の知り合いの福島県出身の人の話によれば、会津の人たちは今でも「薩長憎し」と思っているらしい……。明治政府は薩長連合を中心とする反徳川政府が、戊辰戦争において奥羽越列藩同盟（陸奥・出羽・越後の諸藩）を中心とする親徳川勢力を逐次倒していくことによって成立したものであるから、新政府の要職を薩長出身者が占めたのは当然。その中でも、薩摩は西郷隆盛の造反（？）によって一定のダメージを受けたから、明治政府の中樞は長州が独占したと言っても過言ではない。

大正・昭和を経て平成の世となった今でも、ポスト小泉の最有力候補である安倍晋三官房長官は安倍晋太郎の息子だが、彼らはれっきとした長州藩の出身……。また司馬遼太郎の『坂の上の雲』の主人公である秋山兄弟は松山の出身だが、松山は明治維新において何の役割も果たせなかったボンクラ藩だったから、陸軍と海軍で力を発揮していくについての彼らの苦勞が並大抵でなかったことは、小説を読めば明らか。したがって、賊軍のトップに位置していた会津藩の出身者は、明治政府の官僚となっても軍人となっても肩身の狭い思いをしたことは容易に想像できること。

### 会津武士がキーワード……

しかして、この映画の主人公、松江豊寿（松平健）は会津の出身で、この映画のキーワードは会津武士。そしてその象徴が、あの特徴的な髭＝バルト。あの髭と軍服姿を観て私が思い出したのは、NHK 総合放送の朝の連続ドラマを一躍有名にした昭和41年の『おはなはん』。あのドラマでは高橋幸治が、この映画での

松平健と同じような髭をはやしていたが、両者を比べてみると、やはり松平健の方が立派……？

### 「瓜二つ」のロケセットと、「大林宣彦監督」説は……？

今年6月に出版される私の『シネマルーム9』の表紙を飾るのは、『男たちの大和／YAMATO』（05年）の撮影のため、6億円かけて尾道につくられた戦艦大和の実物大のセット。私は2005年11月23日、呉の「大和ミュージアム」を、そして24日に尾道の大和のロケセットを機嫌よく見学したが、このロケセットに異論を唱えたのが出身地の尾道で数多くの映画を撮影している大林宣彦監督。2006年4月24日付朝日新聞（夕刊）によれば、その趣旨は「人寄せのための公開は、戦争やふるさを商売にしているようで恐ろしい」というもの。この主張が理解できないわけではないが、「そこまでこだわらなくてもいいのでは」というのが私の主張……。

それはともかく、この『バルトの楽園』撮影のために、3カ月かけて鳴門市に建設したのが板東俘虜収容所。5万7千平方メートルあったという収容所が、2万平方メートルの元ゴルフ場跡地に再現され、このオープンセットで約3カ月間撮影が行われたとのこと。

たまたまこの映画の試写室で一緒になった浜村淳氏の話によれば、彼はわざわざこれを見学してきたとのこと。そして、入場料は400円だったとのこと。ミーハー的興味の強い私は、「是非、私も行かなくちゃ」と思ったが、それと同時に思い浮かべたのがこの大林宣彦監督の説……。でも、映画のためにつくられたオープンセットを、できるだけ広く映画ファンに開放して見学してもらうことが、そんなに悪いこと……？

### 日本はドイツと本当に戦争したの……？

日本がアメリカと戦争したことについて、「エエー、ウツソー……！」と言う今どきの若い子がいるらしいから、日本がドイツと戦争したと聞くと、「そんなはずはない」という若者はもっと多いのでは……？

多くの日本人はドイツ好きで、私の大学時代も第2外国語と言えば圧倒的にド

イツ語を選択する人が多かった。日本は、明治政府の成立後、イギリス・アメリカ・ドイツ・フランスなどに多くの若者を派遣して、国会・行政・司法のあり方はもとより、陸海軍の編成や武器などすべてについて、どの国を手本にすれば良いかを一生懸命勉強した。その結果、陸海軍のあり方についてドイツ方式を採用することになったのは、まさにドイツがヨーロッパ最強の国と認識されたため。これは法律の分野でも同じで、ひと昔前の法律の勉強といえば、「ドイツ法では……」というものが多かった。さらに、アメリカ・イギリス・ロシア・オランダなどに対抗すべく結んだ「三国同盟」のメインはドイツだったから、日本にとってドイツは、なおさら親しみの強い国……。ちなみに『ローレライ』（05年）に登場する伊507は、ドイツのUボートを日本海軍が接收した潜水艦だ。

ところが第1次世界大戦では、日本は日英同盟にもとづいて、イギリスと戦っているドイツと敵対することになった。結果的に第1次世界大戦は日本にとっておいしい戦争（？）となり、海軍は地中海に駆逐艦隊を派遣した程度、陸軍はドイツの極東拠点たる青島を攻撃した程度で、「戦勝国」たる立場を手に入れることになった。この映画で描かれるのは、青島にたてこもり捕虜となったドイツ人将兵4700名のうちの一部だが、第1次世界大戦の主戦場はヨーロッパ本土。その壮絶な塹壕戦の有り様は、エリッヒ・マリア・レマルクの感動作、『西部戦線異状なし』を是非一読してほしいもの……。

## 松江中佐 VS 南郷中佐

1914年の青島の攻防戦におけるドイツ人捕虜4700名は、当初全国12カ所の捕虜収容所に振り分けられ、後日それが6カ所に統合されたとのこと。あの当時は、いくらエリート軍人でも、ハーグ条約をきちんと理解し、捕虜に対する待遇のあり方を真面目に勉強している人は少なかったはず。したがって松江中佐のような収容所所長は例外で、これと好対照をなす、地獄の久留米収容所所長の南郷巖中佐（板東英二）のようなタイプの軍人が圧倒的に多かったはず……。南郷中佐の登場は、はじめの方だけだが、素人っぽい板東英二の演技による主張や演説は、あの当時の標準的かつ画一的な思想にもとづくもの……。

そう考えると、松江中佐の「彼らも国のために戦ったのだから、犯罪者ではな

く人道的に扱うべき」との考え方の下にとられた「地元民と捕虜との融和を図ろうとする方針」は、ホントはすごいもの。もっとも、10年前の日露戦争の時代は、もっとのどかな時代であったため、松山でのロシア人捕虜には、もっと幅広い自由があったようだが……。それはともかく、この松江中佐の方針を率直に理解できる陸軍省の官僚たちが少ないことは多田少将（泉谷しげる）や島田中佐（勝野洋）の言動を見れば明らか。さらに、直属の部下でも高木繁大尉（國村隼）はこれを十分理解したものの、若手の伊東光康少尉（阿部寛）は、不満だらけ……。もっとも、この松江中佐の捕虜への寛容な待遇は危険と背中合わせ。万一捕虜の脱走などの問題が起きた場合は……？

### 脱走兵の出現だが……？

捕虜収容所には脱走がつきもので、その有り様を描いた傑作映画がステューブ・マックィーンを一躍大スターにのし上げた『大脱走』（63年）。

当初、久留米収容所に収容されていたカルル・バウム（オリバー・ブーツ）は、南郷所長のあまりにも非道な捕虜への待遇に耐えきれず、脱走を決意し実行したが、所詮逃げ通すのは無理なこと。たちまち追手に捕まってしまう、さらにひどい仕打ちを。こんなカルルだから、板東俘虜収容所に移され、格段に違う捕虜への待遇を受ければ、それで満足すればよさそうなものだが、やはり脱走グセは治らないもの……。遂にこのカルルが脱走したから、収容所側は大慌て……。となるのが普通。しかし、慌てて陸軍省に報告しようとする伊東少尉を制し、「どうせ逃げられやせんよ」と泰然自若の姿勢を示したのが松江所長。捕虜に脱走されたりしたら、所長の責任問題は免れないうえ、他の捕虜に対する影響大であることは明らかだから、松江所長がこんな姿勢を示したのは、私にもかなり意外だったが……？

### 板東の人はいい人ばかり……

この映画に登場する板東の人は、ホントにいい人ばかり。その典型が、脱走兵カルルに気づきながら、それを官憲に突き出そうとしないばかりか、逆に傷の手当てをしてやったり、食糧を与えてやる村の女すゑ（市原悦子）やその娘のみ

(中島ひろ子)。このようなもてなしを受けたカルルは、自らの意思で収容所に戻っていくことに……。松江所長の妻、歌子(高島礼子)も偉い。ドイツ兵の父と日本人の母を持つ少女、志を(大後寿々花)が戦争に行った父を探して、板東俘虜収容所を訪れてきた時、松江所長のはからいによって、自分の子供同様に志をの面倒をみるのが歌子。もっとも、これは映画だからできること(?)で、実際にはなかなか難しいことかも……。また、松山でもロシア人捕虜と日本人女性との恋愛模様があったようだが、この映画でドイツ人捕虜のヘルマン・ラーケ(コスティア・ウルマン)に折り鶴の折り方を教えているうちに、恋愛模様を展開していくのが、村の娘マツ(中山忍)。

他方、松江家の馬の世話をしている馬丁宇松(平田満)は、自分の息子を戦争で失っているため、ドイツ人を毛嫌いしているが、むしろそれが敵対国ドイツやドイツ人に対する国民感情としては当然のこと。したがって、この映画のように村を挙げてドイツ人捕虜に優しく接するところまで、村民とドイツ人捕虜との融和を実現した松江所長の手腕はすごいもの。そしてその姿は、俘虜製作品の展覧会で最高潮に……。

### 真の武人同士は……

この映画で青島総督のクルト・ハインリッヒを演ずるのは、『ヒトラー～最期の12日間～』(04年)でヒトラー役を見事に演じたブルーノ・ガンツ。彼は日露戦争での「旅順の戦い」におけるステッセル將軍のようなもの……。 「敗軍の将」というのはあまりやりたくないものだが、ステッセル將軍が乃木大将に抱いたのと同じ気持を、ハインリッヒ総督も松江中佐に対して抱いていたはず。すなわち、真の武人同士はお互いをよく理解し、尊重し合えるということだ。

もっとも、このハインリッヒ総督が、すべての部下たちの尊敬を集めていたことはたしかだが、ドイツの敗北と降伏を聞いて自殺しようとした姿を見れば、ハインリッヒ総督よりも松江中佐の方が器が上かも……？

### ドイツ人の音楽的素養の高さにビックリ……

松江所長がドイツ人捕虜を「厚遇」したのは、会津の武士道に則った人道的見

地によるものだが、それ以外にも文明国ドイツ、教養の高いドイツ人捕虜からさまざまなものを学ぼうとする姿勢があったことは明らか。現にドイツ人捕虜たちは、バイオリン演奏や器械体操、そして植物採集からおいしいパンのつくり方、印刷技術まで、さまざまなものを板東の村民たちに教えたから、村民たちがそれらを学ぶ中でドイツ人に対する尊敬の念を深めていったことは明らか。

とりわけ音楽的素養の高さは、さすがベートーベンを生んだ国と感心。管弦楽団の指揮のみならず『第九』を指揮する人、女性合唱団がいないため男性合唱のみに編曲する人、見事にバイオリン演奏をする人、その他すごい音楽的素養を持った捕虜ばかりが集まったものと感心。大ドイツ帝国が1918年に降伏し、自由の身となったそんな捕虜たちが、松江所長と板東の村民たちへの感謝の気持ちを込めて演奏する『第九』は……？

### カラヤンよりもフルトベングラーよりも……

この映画の圧巻は、最後に登場するドイツ人捕虜によるベートーベンの『交響曲第九番合唱付』の演奏。日本では毎年、大晦日に『第九』が演奏されるのが恒例となっていることからわかるように、『第九』は多くの日本人が大好きな曲。そしてそのようになったルーツが、この映画に描かれているということだ。

大学時代、クラシックのレコードをよく聴いていた私は、『第九』の最高の演奏はカラヤン指揮・ベルリンフィルハーモニーのものだ、いや、録音状態は悪いけれども、もっと昔のフルトベングラー指揮のものだという議論をしていたことを今でもよく覚えている。しかし私が最も感動した『第九』は、この板東俘虜収容所でのドイツ人捕虜たちによる手づくりの演奏。もちろん、男性4人が並んだ「合唱」ははじめて観たが、こんな感動的な『第九』の演奏を観たり聴いたりしたのもはじめて。そこで思わず涙が頬を伝わることに……。

今から90年前の片田舎の人たちに管弦楽の素養などあるはずはないから、こんな音楽的素養を持たない島国日本の田舎モノにも感動を与えるのが、ベートーベンの『第九』だということをあらためて認識。そして、まさに音楽は人間の心を結び、世界を結ぶものだということを実感！

2006(平成18)年5月10日記